

資料8 採捕された魚類の分布と特徴



採捕された魚類の分布と特徴*7

<タナゴ>

タナゴの仲間は、イシガイ科の二枚貝に産卵する特殊な繁殖生態を進化させている。熟した卵を持つ雌は二枚貝に卵を産みこむための産卵管を発達させる。卵は二枚貝のエラの中で孵化し、仔魚はそこで1ヵ月ほど育ち(秋に産卵する種では半年ほど)、稚魚になってから泳ぎ出す。どの種もきれいな婚姻色を表すので、観賞用として人気がある。

○タナゴ類の見分け方

① アブラボテ属

他のタナゴ類よりも長いヒゲを持つ。ヒゲを底に向けて泳ぐことが多く、よく目立つ。側線は完全(例外もある)。体側面の後半の青みがかかったスジがない。ヒレの条の間の膜に、ぼうすい形の黒い斑点がある。幼魚や雌の背ビレに黒斑はできない。

② バラタナゴ属

ヒゲがない。口は小さい。側線は不完全。体が平べったい。体側面の後半に青いスジがある。ヒレの条の間の膜には色につかないか(幼魚と雌)、膜全体が灰色(雄)。幼魚と雌の背ビレの前縁に丸か三角の黒斑があり、さらにその前縁は白い。

③ タナゴ属

多くはヒゲを持つ。イチモンジタナゴなどでは短くこぶ状。ヒゲをうしろに倒しているアブラボテ属ほどには目立たない。側線は完全(例外もある)。原則として、体側面の後半の青みがかかったスジがある。ヒレ全体にカスリ模様のようなパターンが見える(特に雄)。幼魚の背ビレ中央付近に黒斑を持つ種がいる。体が細長い種が多いが、オオタナゴなど平たい種もいる。

○ヤリタナゴ コイ科アブラボテ属

【分布】

北海道と離島を除く全国。ただし東北太平洋側はおそらく移入。国外では朝鮮半島。

【生態】

川や水路の流れに多い。琵琶湖など大きな湖沼の沿岸にいる。動物食にかたよった雑食性。産卵期は春～初夏。マツカサガイ、ニセマツガサガイ、ヨコハマシジラガイなどに産卵。孵化した仔魚はそのまま母貝内で成長し、1ヶ月ほどで母貝から浮出する。卵はぼうすい形。

【その他】

タナゴ釣りの対象として人気がある。比較的大きくなり、口も大きいので釣りやすい。スレや病気に強く、飼いやすいが、室内水層で卵が成熟するのは稀。開発による生息地の破壊とそれに伴う二枚貝の減少、ブラックバスやブルーギルの食害等により生息数は減少している。2007年には環境省レッドリストの準絶滅危惧カテゴリに指定された。

<オイカワの仲間>

河川中流域で最もポピュラーな小魚であり、東アジアで著しく多様化して繁栄しているグループの一部である。日本ではオイカワなど4種がいて、いずれも尻ビレ(特に雄)が後方に延びるという共通の特徴を持つ。多くは雑食性だが、ハスのように大型の肉食魚もいて、多様化の一端が垣間見える。オイカワは川の小物釣りの対象として人気がある。

○カワムツ

【分布】

中部地方以西の本州、四国、九州。移入により関東地方など。

【生態】

河川の中～上流域に広く生息。淵やよどみなど流れのゆるやかな場所で、樹木や背の高い草などの陰を好む。雑食性。水生・陸生昆虫などの小動物、付着藻類や糸状藻類などを食べる。2～3年で成熟する。産卵期は5～8月ごろ。つがいで流れのゆるやかな浅瀬で産卵し、尻ビレと尾ビレをはためかせ、砂礫を巻き上げて卵を埋める。

【その他】

かつてはヌマムツと同種と扱われており、ヌマムツがカワムツ A 型、カワムツ B 型と呼ばれていた。しかし、交雑がないこと、鱗が細かいこと、体側の縦帯や胸ビレと腹ビレの前縁の違いや、カワムツが河川上中流に住む流水適応型に対してヌマムツは用水路や支流、湖沼などの緩やかな流れを好む止水適応型であることから別種とされた。オイカワのように食用にされることはあまりないが、美味。この仲間は高温と酸素欠乏に弱いので、採集後に持ち帰る際には過密をさける。川の小物釣りの入門に適する。

<モロコの仲間>

俗にモロコと呼ばれる小魚は雑多な系統を含む。属間の形態のちがいはわずかだが、しかし確固たるもので、慣れれば間違えることはない。しかし、スゴモロコ類各種を見分けることは難しい。スゴモロコを除き飼育は簡単で、水槽内で繁殖することができる種もある。

○モツゴ

【分布】

全国。関東以北ではおそらく移入。朝鮮半島と中国大陸。

【生態】

浅い湖沼、ため池などに住む。水質汚濁や環境変化への適応力が高く、富栄養化が進行した湖沼や護岸河川、公園の池にも定着している。付着藻類にかたよる雑食性。繁殖期は4-8月で、春から夏にかけて比較的長期間に渡る。4～5月に、流木など硬いものの表面に粘着卵を列状に産み付ける。雄は卵を守る。1年で成熟。オオクチバスなどがいない生息地では高密度にすることが多い。

【その他】

口が小さく釣りにくい。屋内水槽でも自然産卵する。近縁種のシナイモツゴとウシモツゴは絶滅危惧種。

○タモロコ

【分布】

静岡県以西の本州と四国。移入により各地。日本固有種。

【生態】

農業水路、浅い湖沼、ため池などに住む。モツゴと同時にいることが多いが、本種はやや流れのある場所を好む。4～6月の増水時に水草や冠水植物に卵を産み付ける。雑食性。1年で成熟。

【その他】

モツゴとは口のかたちとヒゲの有無で識別する。モツゴより口が大きく釣りやすく、小物釣りの入門に向く。近縁種で琵琶湖特産のモンモロコとは体形、ヒゲの長さ、尾ビレの切れ込みや腹の着色の程度などで見分ける。

<メダカの仲間>

コイ科の稚魚までメダカと呼ばれることがある。しかし、メダカの仲間とコイ科が分かれたのは約2.5億年前で、それはヒトと、最も遠いほ乳類(カモノハシ)が分かれた時代(1.9億年前)よりも昔である。メダカとコイ科の関係はそれほど遠く、よく見ると形もかなり違う。

○ミナミメダカ

【分布】

兵庫県日本海側と岩手県南部以前の本州、四国、九州、南西諸島。日本固有。

【生態】

キタノメダカに似る。以下補足。体長4cmほどの小型の魚。側線はない。背ビレはかなり後ろにあり、腹ビレの先端より後ろとなる。腹ビレは前後に長い。オスの背ビレの膜には欠ける部分があるが、メスにはない。胸ビレと腹ビレはメスの方が大きい。背ビレと尻ビレはオスの方が大きい。ミナミメダカに比べ、キタノメダカでは体側後半に黒色の網目模様があり、オスの背ビレの欠けが浅く軟条の長さの半分以下とされている。

【その他】

2011年にメダカが2種に分けられ、そのうちの「南日本集団」と呼ばれていたもの。学名についてはこちらが引き継いだ。観賞用のヒメダカは、おそらく関東地方のミナミメダカ由来。実験動物として用いられる。キタノメダカとともに、飼育は簡単。屋内水槽でも容易に繁殖する。このことがわざわざいって、近年、「自然保護」と称して、本来の分布域とは異なる由来のものの放流が横行している。とくに都市部での遺伝子汚染が深刻。環境省のレッドリストに絶滅危惧Ⅱ類(VU)として記載されている。